「いのちありて」の背景を巡って～雑感～

田中　真奈美

　山口通之先生から“伊那高女の皆さんが学徒動員で働いていた旧三菱重工業株式会社名古屋航空機製作所を見学に行きましょう、同窓会としては一度見ておくべきだと思うよ。”とお誘いをいただき、私が今同窓会の仕事にかかわらせていただいていること、また今年の実地踏査で伊那高女の名古屋動員を取り上げてくださったといういくつかの偶然が今回の名古屋行きのご縁につながったと、とてもありがたい思いで参加させていただきました。

　伊那高等女学校の戦時下の出来事については、伊那高女三十三回生有志の方々が編集された『いのちありて』や、伊那弥生ヶ丘高等学校の記念誌、『伊那路』、後藤俊夫監督の下で映像化されたドキュメンタリー映画、ＮＨＫの証言映像等々で知る機会は多少ありましたが、往路の車中で、その当事者である岸本多恵子さん（高女三十三回卒）が語ってくださる勤労動員という過酷な体験の詳細な事実は、私が知る以上に想像をはるかに超えるものばかりで、実際にこれからその場を訪れるという、半ば興奮にも似た高ぶった気持ちで暑い名古屋に向かいました。

　今回、思いがけず伊那路に寄稿させていただく機会を得、学ぶこと、思う事の多かった二日間の中で、同窓生としては忘れてはいけない、先輩方がすざましい経験をした学徒動員の舞台であった場所に焦点を絞って、感じたことを書かせていただきました。

《当時のままの時計台》

　三菱の工場があった名古屋市港区の大江町は、今も多くの工場の大きな建物がその間を抜けるまっすぐな広い道路の両側に並んでいて、少しの緑はあるものの自分が住んでいる地域に比べると何か無機質で殺風景なものを感じました。二つの大地震と名古屋空襲によって多くの血が流れた土の上を今は広い道路が走り、当時廃墟となった街にまた大きな建物が建てられ、一面の焼け野原であった荒涼とした死の光景が広がっていたことが遠い昔のようでもあり、またその面影を残しているようでもありました。

　当時、女学生たちが寮から工場までの徒歩二十分の道のりに目印としていた工場の時計台は、今も変わらぬ工場のシンボルであり、当時も今も変わらぬ時を刻んでいました。ここが先輩方の青春の舞台であり、その１ページは悲劇であったのだ、と改めて感じました。

《名古屋空襲殉職者慰霊碑》

　戦争が末期に近づくにつれて戦局は悪化の一途をたどり、終戦の年の3月頃には、軍用機生産の主要なメーカーであった三菱の工場破壊のため、この地域は空襲の的となり、昼夜を問わず攻撃が繰り返されたと聞きます。この慰霊碑にはその犠牲となったおよそ400名近くの方々のお名前が銅板に刻まれていて、その中に伊那高女の勤労動員でただ一人犠牲となってしまった飯島米子さんのお名前も並んでいました。本当に聞いていたことが現実であったのだと実際に目にして改めて思い知らされました。ただこの慰霊碑は工場アパートの敷地の奥まった狭い場所にこじんまりと、またひっそりと建っていて、表通りを歩いていたらまったく気がつかず見過ごしてしまいそうで、想像していたものとは違っていて、ふと寂しさを感じました。

《想い》

わずか一五、六歳の少女が親元を離れ、厳しい集団生活に耐えながら重労働をしていたこと、大地震や大空襲で常に死の恐怖にさらされて今の時代とは全く違った暮らしをしていたことを思うと、少女たちはどんなに心細かったであろうか、そしてその親御さんのご心配はどれだけのものであっただろうか…同世代の娘を持つ親として、自分に置き換えて考えてみると胸が締め付けられる思いです。

今回の実地踏査は戦争の悲惨さを心に深く刻み、先輩方が体験した壮絶な出来事と平和への願いを継承していく思いを確認する場であったと思います。時代を超えて自分で実際に目にしたことはかけがえのない経験でした。

七十四回目の広島、長崎の原爆記念日や終戦記念日の八月が、今年はいつもと違った夏になりました。今回経験し、そして感じた悲しみを語り継がなければならないと心から思います。